

「明石町」
あぢさゐの花の盛りの
かくありし河岸道來つる
幾年なりけむ
『春のことぶれ』
釈 道空

国学院大学 令和7年6月20日(金) 定期号(毎月20日発行) 1部20円
[発行] 国学院大学 [編集] 総合企画部広報課 〒150-8440 東京都渋谷区東四丁目10-28 [電話] 03(5466)0130 [FAX] 03(5466)0528

祭 儀 ■ 大祓(夏越の祓) 6月30日(月)午後4時 神殿 ■ 月次祭 7月1日(火)午前10時 神殿



研究者に聞く

4・5面に続く

冤罪と刑事訴訟法 法の現場で直面する課題

法学部・中川孝博教授

刑事訴訟法の専門家である中川孝博・法学部教授の語り口は、驚くほどにフレンドリーだ。捜査や公判といった手続きに関する法律という、一見ドライなイメージをひっくり返してくれるのは、中川教授がそもそも刑事訴訟法を研究するに至ったきっかけに「コミュニケーション」への興味があったからなのかもしれない。

私たちも一喜一憂を繰り返している、日々のコミュニケーションセッション。そうした日常的なやりとりと、刑事訴訟法が抱える問題は、実は隣り合っているようなのだ。どういふことなのか、自身の歩みと共に、インタビューで尋ねてみた。

文化財を伝えることとは 地域社会を伝えることである

観光まちづくり学部・下間久美子教授

国内旅行の旅先で、歴史的な町並みや建造物を楽しんだという経験をもつ人は、きっと多いだろう。そうした「生きた」観光資源として文化財を活用するというのは、地域にとって一朝一夕に実現できるものではない。文化財保護の制度を理解し、さまざまなアプローチのもとに住民が納得できるかたちを模索してきた実践例が、日本社会の隅々にまで存在しているといえる。

下間久美子・観光まちづくり学部教授は、文化庁の職員としてその最前線に身を置いてきたプロフェッショナルだ。学生時代からの歩みを踏まえつつ、理想の町並みをめぐる歴史の一端を語ってもらった。



令和6年度卒 就職率 97.2%

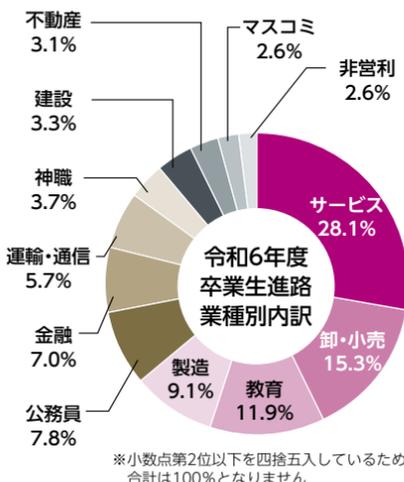
昨年度比1.2ポイントの増加

令和6年度(令和7年3月)卒の国学院大学卒業生の就職率は、97.2%で、前年度から1.2ポイント増加した。学生の就職をとりまく環境として大卒有効求人倍率は、1.75倍で昨年より0.04ポイント上昇し、依然として「売り手市場」が続いている。

民間企業への就職では、サービス業、製造業、運輸・通信業、マスコミ業等の就職者が前年度に比べて増加。選考対策のための独自プログラムを学内で実施している航空業界では、21人が航空各社に就職し、成果を上げている。公務員は国家・地方合わせ152人となった。国家公務員総合職には2人が就職。令和4年度から3年連続で採用実績を上げている。

教育関係では、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の教員と保育士を合わせ231人となった。神社関係では、111人が神職資格を取得した。また、神社界に進んだのは72人(神職資格を取得していない学生も含む)となった。

■就職支援部署の積極活用を
政府要請のルールにより6月1日、令和8年3月卒業予定者の採用活動が解禁された。一方で、ルールに法的な拘束力はなく、人手不足などを背景に企業の採用活動は年々早期



化が進む。キャリアサポート課の担当者は「売り手市場」と言われる環境だからこそ、安易な対策は採用後のミスマッチを生みやすく、就職後の離職率の高さにつながっていると考える。学生の弱みにつけ込んだハラスメントや悪徳商法などのトラブルも発生している。就職活動で少しでも悩みや不安を感じたら、いつでも就職担当部署に相談してほしい」と話す。

本学は、企業、公務員、教職、神職など学生が目指す進路によって、専門の部署がサポートを行っており、進路が明確になっていない低年次から、積極的に各種相談や支援企画の活用を促進している。

みはるかすもの

ドライブの立ち寄り先としてお馴染みの「道の駅」は、平成5(1993)年に103駅からスタートし、令和7(2025)年2月現在、全国に1230カ所まで拡大した日本独自の施設である▼「道の駅」は国土交通省が市町村長からの申請を審査し、登録を行う制度である。国土交通省における稀にみる成功事例と揶揄されるほど、全国に広がり、親しまれている主な要因は、「休憩機能」「情報発信機能」「地域連携機能」の審査3要件を満たせば、運営を地域の「自由度の高い創意工夫」に委ねられているところが大きいと言える。地域の個性豊かで主体的な取り組みが、「道の駅」発展の原動力となっ

ている▼また、時代とともにその役割は変化してきた。初期は道路利用者の休憩機能(第1ステージ)が中心だったが、旅の目的地としての発展(第2ステージ)を経て、現在は地方創生・観光・防災の拠点として地域全体の活性化を促す役割(第3ステージ)を担っている▼とりわけ第3ステージでは、自治体、地域住民、地元企業、観光団体などが一体となって戦略的に連携し、地域の価値を高める「まちぐるみ」の取り組みが始まり、その中核拠点としての「道の駅」の機能強化が図られている▼この30年間で誰もが知るブランドへと成長した「道の駅」は、時代のニーズに応じた進化を続けながら、訪れる人々と地域をつなぐ重要な拠点として、さらなる発展が期待されている。「道の駅」のご当地グルメに舌鼓を打ちながら、その役割に思いを馳せる旅はいかがだろうか。

博物館・企画展

「江戸・東京の祝祭とおしゃれ
—飾る都市と人—」



「江戸砂子年中行事」七夕之図

国学院大学博物館では4月26日～6月22日までの間、企画展「江戸・東京の祝祭とおしゃれ—飾る都市と人—」を開催している。本企画展は、江戸時代末期から明治期にかけて、都市に暮らす人々が祭りなどで日常とは異なる姿を見せる様子を本学や神田神社所蔵の絵画資料などを駆使して読み解こうとする試みだ。

■江戸化粧再現講座 by 紅ミュージアム

5月16日に開催された「江戸化粧再現講座 by 紅ミュージアム」では、紅ミュージアムの学芸員が江戸時代の資料に記されている化粧法について解説した。その後、当時の化粧

法を目的で再現するデモンストレーションを実施した。参加者からは江戸時代の化粧にまつわる文化や、化粧道具などについて多くの質問が寄せられた。

■オンラインミュージアム

5月17日よりYouTube上で配信されている「オンラインミュージアム」は、本学教員が展示資料を解説する紹介動画である。パート1では、大東敬明・研究開発推進機構教授が「祝祭」をテーマに解説。楊洲周延や春斎年昌の浮世絵を通して、江戸から明治期の季節感あふれる祭礼を紹介。「山王祭や神田祭では仮装や山車が登場し、街を彩った」と述べ、「歌川芳藤の作品には近代建築も描かれ、変わりゆく都市と祭り文化の共存が表現されている」と説明した。

■紅点し体験

5月30日に本学学生限定の「紅点し体験」が開催された。まず、紅ミュージアムのスタッフが、江戸時代から変わらない製法で作られている「紅」について、その歴史や技、江戸時代の紅化粧などの解説を行った。その後、実際に「小町紅」を一人一人に点す体験が行われた。重ねる紅の量や、溶く水の量、その人の持つ唇の色によって発色が変わるため、学生は自分たちで筆をとり、紅を点しながらそれぞれ違いを楽しんでいた。体験後は、

紅ミュージアムのスタッフに熱心に質問をする学生も多く、関心が高い様子が見受けられた。

■ミュージアムトーク

5月31日に開かれたミュージアムトークでは藤澤教授が「江戸・東京のおしゃれ」と題し、浮世絵に込められた時代のメッセージと、その味わい方を解説した。

藤澤教授は浮世絵を江戸という新しい都市が生んだ「メディア文化」と位置付ける視点を提示。美人画は今というファッション誌、役者絵はブロマイドやパンフレット、名所絵は観光ガイドの役割を果たしたと述べた。NHK大河ドラマ「べらぼう」の主人公・葛屋重三郎が「版元」として出版プロデューサーを務め、喜多川歌麿や東洲斎写楽らを「絵師」に起用して人気イラストレーターに育てた逸話も織り込み、江戸文化と現代を複眼で捉える楽しさを印象づけた。

トーク後半では展示作品を通して江戸後期から明治期の装いや美意識を紹介。藤澤教授は楊洲周延の「東風俗福つくし」を例に、日常の幸せや「福」への思いを語った。手鏡に映る女性像が欧州でジャポニズムに影響を与えたことにも触れ、「一枚の絵が世界とつながる」と締めくくった。



国学院大学は、令和6年度をもって退職した9人の元教授へ名誉教授の称号を贈ることを決定し、授与式を6月10日に渋谷キャンパスで行った。

9氏に名誉教授の称号授与

- 対象者は次の通り。(敬称略)
◆文学部 菊地康人、新倉真矢子、吉田敏弘
◆法学部 門廣乃里子
◆経済学部 橋元秀一
◆神道文化学部 石井研士
◆人間開発学部 田沼茂紀、安野功、植原吉朗

一般講演会・院友大会を開催



本学卒業生(院友)の組織である国学院大学院友会による令和7年度一般講演会および院友大会が5月24日に明治記念館で開催された=写真。一般公開講演会では「まだまだ続く～歴史を変える挑戦～」と題し、前田康弘・陸上競技部監督と、古屋真弘・同部OB会長が対談形式で登壇した。会場には卒業生や一般市民など約300人が来場し、対談に聴き入る様子が見られた。続いて院友大会が開催され、吉田茂穂・同会長(昭41修・74期神専攻他、鶴岡八幡宮宮司)が「院友としての覚悟を持ち、会を盛り上げたい」とあいさつ。佐柳正三理事長と針本正行学長が祝辞を述べ、母校への支援を呼びかけた。歓迎中には吹奏楽部が演奏を披露。最後に全学応援団によるリーダー公開と校歌斉唱が行われ、今井亮・同会副会長(昭33卒・67期政経)の閉会の辞で盛会のうちに終了した。

宮城県大崎市との相互連携協定を締結

国学院大学(学長・針本正行)と宮城県大崎市(市長・伊藤康志)は、5月30日、観光まちづくりを通じた市民生活の向上、教育・研究の推進、及び地域の発展と人材育成を推進することを目的として相互連携及び協力に関する基本協定を締結した。締結式は同日に大崎市役所で行われ、針本学長、伊藤市長をはじめ、双方の関係者が出席した。◆連携・協力事項▷地域の活性化に関する事項▷地域社会や地域の歴史・文化の振興、発展に関する事項▷地域経済、地域産業の振興、発展に関する事項▷資源管理や環境への取組に関する事項▷国際交流と国際相互理解に関する事項▷人材育成に関する事項▷その他、知見等や知的財産等を生かし、連携及び協力することができる事項

高校教員対象入学試験説明会を開催

高等学校の進路指導担当教諭などを対象に本学の入学試験制度や教育の特徴を説明する高校教員対象入学試験説明会が5月23日、渋谷キャンパスでの対面およびオンデマンド配信によるハイブリッド形式で開催された。冒頭、石川則夫副学長(入学担当、文学部教授)が、「本学では、知識の詰め込みにとどまらず、多様な視点で物事を捉え、自分の言葉で理解・発信できる人材の育成を目指している。また、自らの行動や考えを見つめ直し、相対的に捉える姿勢を重視している」と本学の特徴を説明した。続いて入学課の職員が令和7年度入学試験の実施概況を解説し、入学試験委員長の糸戸節太郎・文学部教授が令和8年度入学試験の制度について説明した。当日は、雅楽サークル「青葉雅楽会」による演奏や、神事努・人間開発学部准教授による体験授業が行われた。説明会後には渋谷キャンパスの自由見学も行われた。

中西 正幸・元神道文化学部教授 逝去

国学院大学元神道文化学部教授の中西正幸氏が5月8日に逝去。81歳。葬儀は近親者により執り行われた。中西氏は昭和19年生まれ。43年国学院大学文学部文学科卒業、46年同大学院文学研究科神道学専攻修士課程修了、49年同博士課程単位取得退学。その後、伊勢神宮に奉職、平成4年に文学部教授として本学の教壇に立つ。8年博士(神道学)を取得、14年神道文化学部教授、27年定年により退職。27年から30年にかけて大学院文学研究科客員教授を務めた。専門は神道学。著書に『神社と祭り』(神社新報社、2011)、『伊勢の式年遷宮—皇室における祖先祭祀の精神』(モラロジー研究所、2007)などがある。

令和6年度 決算

令和6年度学校法人国学院大学決算は、監事および監査法人の監査を経て、5月29日に開催された理事会で承認、6月12日開催の評議員会に報告、了承された。

令和6年度は、学校法人のガバナンス強化や情報公開の推進など、社会的状況を背景に、「中期5カ年計画」にのっとり策定された事業計画を円滑に遂行した。

法人全体では、旧渋谷キャンパス神楽をたまプラーザキャンパスへ移設を行ったほか、大学部門においては相模原グラウンド、隆昌寮（ラグビーフットボール部合宿所）が完成するなど、大型工事を円滑に遂行。

財務面では基本方針とする「資金の安定確保」と「資金の効果的使用」に努めた結果、法人全体で基本金組入前当年度収支差額が16億5000万円の収入超過となり、堅調な決算となった。

※詳細は学校法人国学院大学HPをご覧ください。

【財務部経理課】

若木育成会全国支部長事務連絡会・本部総会を開催



在学生の父母（保証人）で組織される若木育成会による全国支部長事務連絡会と本部総会が、5月17日に渋谷キャンパスで開催された。

総会では、前年度事業報告および決算報告、今年度事業計画についての審議が行われた。また今年度の役員選出も行われ、半田りえ子・前副会長の会長就任、吉田静枝・前会計監査と落合幹彦・前3年生幹事の副会長就任、郡司掛司・前会長の顧問就任がそれぞれ承認された。

その後、会場をグランドプリンスホテル高輪（東京都港区）「プリンスルーム」に移して支部長、学年幹事と5月24日から全国各地で始まる「支部の集い」に出席する本学教職員との懇談会が開催され、和やかに情報交換が行われた。

若木育成会支部の集いを開催

5月24日から、全国各地で若木育成会支部の集いを開催している。6月1日は渋谷キャンパスで東京都第1・2・4支部の集いが行われた。

はじめに、それぞれの支部にわかれて、総会と交流会が開催された。総会では役員選出、研修旅行や箱根駅伝応援等の各種事業の報告がなされ、総会後に行われた交流会では、大学での生活や授業の履修、就職等について、積極的な情報交換がなされた。

その後、全支部が一堂に会して大学説明会が行われ、冒頭、針本正行学長が「AIが進展する社会においても、人と人の学びを大切に、大学は学生一人一人に寄り添った支援を教職員一体で行っていく」とあいさつした。

続いて学生生活・就職・教務の各担当者による説明会が行われた。あわせて、希望者には個別面談も実施された。新入生の保証人との懇談では、針本学長が参加し、質問に答えた。

【お詫びと訂正】

国学院大学学報745号3面「学問ノ道第67回」における記載について一部誤りがありました。お詫び申し上げますとともに、以下のとおり訂正いたします。

誤 渋谷キャンパスに九十余年にわたり鎮座してきた神楽が令和7年3月にたまプラーザキャンパスに移築された。

正 渋谷キャンパスに九十余年にわたり鎮座してきた神楽がたまプラーザキャンパスに移築され令和6年12月に清祓式を執り行った。

資金収支計算書

令和6年4月1日から令和7年3月31日まで

(単位：百万円)

収入の部				支出の部			
科目	予算	決算	増減	科目	予算	決算	増減
学生生徒等納付金収入	14,769	14,421	348	人件費支出	10,524	10,565	△41
手数料収入	767	925	△158	教育研究経費支出	5,045	4,737	308
寄付金収入	273	209	64	管理経費支出	1,432	1,348	84
補助金収入	3,254	3,600	△346	借入金等利息支出	7	6	1
資産売却収入	0	0	0	借入金等返済支出	643	643	0
付随事業・収益事業収入	243	268	△25	施設関係支出	1,240	1,106	134
受取利息・配当金収入	179	276	△97	設備関係支出	484	375	109
雑収入	385	510	△125	資産運用支出	3,932	3,888	44
借入金等収入	501	0	501	その他の支出	582	634	△52
前受金収入	2,702	2,907	△205	予備費	269		269
その他の収入	1,765	1,701	64	資金支出調整勘定	△464	△610	146
資金収入調整勘定	△3,128	△3,179	51	当年度支出合計	23,694	22,692	1,002
当年度収入合計	21,710	21,638	72	翌年度繰越支払資金	7,659	8,589	△930
前年度繰越支払資金	9,643	9,643	0				
収入の部合計	31,353	31,280	73	支出の部合計	31,353	31,280	73

事業活動収支計算書

令和6年4月1日から令和7年3月31日まで

(単位：百万円)

収入の部				支出の部			
科目	予算	決算	増減	科目	予算	決算	増減
学生生徒等納付金	14,769	14,421	348	資産売却差額	0	0	0
手数料	767	925	△158	雑収入	0	0	0
寄付金	270	206	64	その他の特別収入	50	41	9
経常費等補助金	3,219	3,575	△356	特別収入計	50	41	9
付随事業収入	193	218	△25	資産処分差額	0	67	△67
雑収入	385	437	△52	その他の特別支出	0	0	0
教育活動収入計	19,603	19,781	△178	特別支出計	0	67	△67
人件費	10,521	10,529	△8	特別収支差額	50	△26	76
教育研究経費	6,839	6,555	284	【予備費】	269		269
管理経費	1,542	1,456	86	基本金組入前当年度収支差額	704	1,650	△946
教育活動支出計	18,902	18,540	362	基本金組入額合計	△1,835	*△1,473	△362
教育活動収支差額	701	1,241	△540	当年度収支差額	△1,131	177	△1,308
受取利息・配当金	179	311	△132	前年度繰越収支差額	△9,755	△9,755	0
その他の教育活動外収入	50	129	△79	基本金取崩額	0	2	△2
教育活動外収入計	229	441	△212	翌年度繰越収支差額	△10,886	△9,576	△1,310
借入金等利息	7	6	1	(参考)			
その他の教育活動外支出	0	0	0	事業活動収入計	19,883	20,262	△379
教育活動外支出計	7	6	1	事業活動支出計	19,179	18,612	567
教育活動外収支差額	222	435	△213	※第1号基本金…13億6,200万円 教育の質向上のために取得した固定資産の価格			
経常収支差額	923	1,676	△753	■第2号基本金…1億円 教育の質向上のために将来取得する固定資産に充てるもの			
				■第3号基本金…1,100万円 基金として継続的に保持し運用すべき資産となるもの			

貸借対照表

令和7年3月31日

(単位：百万円)

資産の部				負債および純資産の部			
科目	本年度末	前年度末	増減	科目	本年度末	前年度末	増減
固定資産	121,259	119,214	2,045	負債の部	11,900	12,551	△651
有形固定資産	63,550	64,076	△526				
特定資産	54,879	52,335	2,544	基本金総額	127,983	126,512	1,471
その他の固定資産	2,830	2,803	27	第1号基本金	107,951	106,591	1,360
流動資産	9,048	10,094	△1,046	第2号基本金	3,500	3,400	100
				第3号基本金	15,262	15,251	11
				第4号基本金	1,270	1,270	0
				繰越収支差額	△9,576	△9,755	179
				純資産の部合計	118,407	116,757	1,650
資産の部合計	130,307	129,308	999	負債および純資産の部合計	130,307	129,308	999



奥野高廣

学士院賞は、人文・社会・自然科学の広範な分野を対象として、顕著な業績を上げた研究者に授与される、日本学術界における最高水準の栄誉とされる賞である。さらに、そのなかでもとくに優れた業績には、上位賞である恩賜賞が授与される。

この賞の制度は、明治44（1911）年に帝国学士院において創設された。その母体となった学術機関は、明治12年に設立された東京学術院に遡る。同会は、欧米諸国の制度、とくにフランスのアカデミーを範とし、明治39年には帝国学士院へと改組された後、昭和22（1947）年に日本学士院と改称されて今日に至る。

受賞者は、院友（国学院大学卒業生）の研究者からも輩出されており、たとえば武田祐吉（21期）「万葉集校定の研究ならびにその万葉学における業績」昭和25年、米原正義（62期）「戦国武士と文芸の研究」昭和53年、小川信（51期）「足利一門守護発展史の研究」昭和56年、また高等師範部中退ながら所三男（近世林業史の研究）昭和56年）らがいる（以上日本学士院より）。

恩賜賞受賞者としては、八代国治（5期）「長慶天皇御即位の研究」大正13年）や奥野高廣（36期）「皇室御経済史の研究」昭和20年）らに屈指できる（以上帝国学士院より）。院友に限定しない

ければ、本学所縁の研究者の受賞例はさらに多数におよぶ。2025年は、恩賜賞を受賞した奥野高廣（1904〜2000年）の没後25年にあたる。昭和3年に国学院大学国史学科を卒業した奥野は、東京帝国大学の史料編纂掛（現・東京大学史料編纂所）に勤務し、室町後期から安土桃山期にかけての史料編纂に従事した。昭和20年からは母校でも教鞭をとり、前出の小川信もその薫陶を受けた。代表作「皇室御経済史の研究」が一等著名であることはもちろん、大学院での講義内容に基づいた「戦国時代の宮廷生活」（遺著）も広く知られるほか、編纂の史料集「織田信長文書研究」は現在も基礎的文献として重用されている。

研究開発推進機構では、彼の卒業論文「徳政令の社会的意義」を収蔵している。そこには、既存の史論に対する奥野の立ち位置を問うとともに、大量の引用史料の読み込み余地に関する厳しいコメントの一方、前向きに今後の改訂を期す旨、審査にあたった渡邊世祐による評がみえる。

彼も人なり…との思いは惜越に過ぎるかも知れない。けれども、卒業論文からは、後年の偉大な研究者でさえ、学生時代には現代の学生とさほど変わらない指摘を受けたという意外な一面が覗ける。ここから、我々は研究に向き合う姿勢をいまい一度省みなくてはいけない。しかし同時に、学問の道を歩むうえでの一抔の勇氣くらいは頂戴してもよからう。

研究開発推進機構助教（特別専任）比企貴之

— 前編 —

訴訟関与者の奥深いコミュニケーション



法学部・中川孝博教授

刑事法のなかでも、特に刑事訴訟法という法律を専門としています。犯罪・犯人・刑罰を確定させる手続きを規定する法律なのですが、起訴前手続きである捜査や公訴を経ての公判、そして場合によっては上訴など、その範囲は広いものです。そうした刑事訴訟法において私は、「訴訟関与者のコミュニケーションの適正化」を、長年研究しています。詳細は後ほどお伝えしますが、刑事訴訟法という堅苦しいイメージのある法律の研究において、生々しいコミュニケーションをめぐる議論が存在するという点自体、意外に思われるかもしれません。私がずっと刑事訴訟法が好きなのは、まさにこのコミュニケーションの奥深さが存在するからです。いや、むしろ、実はかつては刑事訴訟法に興味がなかったのですが、わけてはいないというのが正直なところなのです(笑)。本来はコミュニケーションに興味があって、そのうち偶然にも刑事訴訟法の道に深く分け入っていった、と表現したほうが正確でしょう。

読者の皆さんも身に覚えがあると思うのですが、たとえば思春期の頃というのは、他人とのコミュニケーションがうまくいかないと悩むことがあり、友人と雑談をしていても、自分の言葉がちよっと聞かずに受け止めてしまったり、話題を提供したのにスルーされてしまった、ということが起こりやすい。あるいは保護者やけんかしていても、年長者のほうが言葉も豊富で、自分より賢いと思われてしまったり、なんてこともよくあります。読者の皆さんも身に覚えがあると思うのですが、たとえば思春期の頃というのは、他人とのコミュニケーションがうまくいかないと悩むことがあり、友人と雑談をしていても、自分の言葉がちよっと聞かずに受け止めてしまったり、話題を提供したのにスルーされてしまった、ということが起こりやすい。あるいは保護者やけんかしていても、年長者のほうが言葉も豊富で、自分より賢いと思われてしまったり、なんてこともよくあります。



なかがわ たかひろ
博士(法学)。専門は刑事訴訟法学。主な著書に『合理的疑いを超えた証明』(現代人文社、2003年)、『刑事裁判・少年審判における事実認定』(現代人文社、2008年)、『法学部は甦る!』(上)(現代人文社、2014年)、『刑事訴訟法の基本』(第2版)(法律文化社、2023年)など。

全編はこちらから



後編



前編

国学院大学メディア

「人間の学が知の乾きを潤す」
国学院大学が蓄積し醸成してきた知恵を多彩なスタイルでご紹介します。



研究者に聞く

刑事訴訟法

制度の中にある「人間らしさ」

こうしたコミュニケーションをめぐるズレというのは、大人になっても、日常でいくらか体験することだと思えます。そして子ども時代の頃から、このコミュニケーションのズレといふか、ズレといふもの、デイスコミュニケーションの果てに、ドラマや事件というものが発生してしまっているわけですが、中学生から高校生にかけての私はアガサ・クリスティの作品を読んで理解することにのめりこんでいました。

「構造としてのデイスコミュニケーション」への気づき
さて、大学3年生のときに入った刑事訴訟法のゼミで、人生を変えるような出来事を体験しました。それは、かつて昭和49(1974)年に発生し、私がゼミ生だった当時まだ無罪と判断されていた「甲山事件」を検討する、という機会でした。知的障害者施設で園児2人が死亡し、施設職員が殺人容疑で逮捕・起訴された事件です。

結論から申し上げますと、この事件は平成11年に無罪が確定するのですが、被告人にとっては四半世紀の間が流れてしまったのです。ここに明確な悪者はいない。問題は、こうした訴訟関与者たちのコミュニケーションがうまくいかない。構造上にあるのではないかと、このような疑問を起点に進められた研究について、インタビュー後編ではお話ししようと思います。

— 前編 —

地域資源として文化財を生かすとは

観光まちづくり学部・下間久美子教授



建築を通して学んだ形と仕組みの関係

私の専門は、文化財保護です。建築や集落、町並み、文化的景観を守り、地域の発展に生かすことを主軸としていて、都市保全の側面でもあります。この分野を選んだのは、建築学を学んでいた大学4年生の時でした。所属していた日本建築史研究室の大河直躬先生が長野県の調査を行っていたので、同行し、現場で図面をとる作業をさせていただきました。

歴史も好きでしたが、設計も好きだったので、大学4年生の時には前半で卒業研究を、後半で卒業設計をしました。日本の古建築も好きでしたが、この頃は、幾何学的な形と用途の合理性が結びついたルネサンス期の理想都市にも関心があったので、卒業研究ではユートピア文学における都市の形をテーマにしました。トマス・モア著、平井正穂訳『ユートピア』(岩波書店、1957年)、ウィリアム・モリス著、松村達雄訳『ユートピアだより』(岩波書店、1968年)等です。結果、ユートピアの実現は、都市の形よりもむしろ、格差を無くした公平で平等な社会の仕組みに希望を託しているという気づきを得ました。

活用を広げ、保護のあり方を多様に

私に関わってきたのは、「有形文化財」としての建築物都市遺産です。歴史の建物が多くは、建てられてから何回か改修されています。有形文化財では、その改修の経緯を解体調査で明らかにし、最も価値ある時代の姿を表す「復元」が行われます。技術や材料、社会的・文化的背景等を知らずとも大切な行為です。

体調査と復元は重要でした。医学の発展に解剖学が不可欠であること似ているかもしれません。「有形文化財」においては、古社寺を中心に発展した解体調査が戦後に多くの民家にも行われるようになり、一方で「民俗文化財」としての民家は、それが人々によって使われ続けてきた姿に価値があるとされるので、人が使わなくなっても現状の維持が基本となり、復元は通例行われません。日常の生活を紐解く民俗学は、建築学を含む多様な分野と関係します。民家の保存活用の歴史には、大正期から昭和初期にか

生はゼミでこの事件を検討することになりました。そのときに、刑事手続きをめぐる、非常に大きなデイスコミュニケーションを感じ取りました。私にとって1審の判決は説得力をもつものだったのですが、その後の2審は、1審で審理が尽くされていないとして、しかし、それぞれの裁判官が判断を偏らなまれているわけではないのです。一方で、市民やメディアは捜査や裁判をめぐって誰かを悪者にするようなパッシングを続ける……。



しもつま・くみこ
博士(工学)。専門は文化財保護(建築物、集落・町並み、文化的景観)、歴史まちづくり。1994年より文化庁に勤務し、ユネスコや文化財保存修復国際センター等にも出向。2022年より現職。著書に共著『観光まちづくりの展望』(学芸出版社、2024年)など。

全編はこちらから



後編



前編



文学部講演会 西洋古典の社会的意義を語る



はじめに登壇したアマラル助教

5月31日、国学院大学文学部講演会「世界におけるギリシア・ローマ古典教育」が渋谷キャンパス芸術メディアセンター常磐松ホールで開催され、研究者や学生などが参加した。

冒頭、木原志乃・文学部教授があいさつにたち、続いて4人の若手研究者が講演を行った。はじめにウイニベグ大学(カナダ)助教のフラヴィア・ヴァスコネロス・アマラル氏が登壇し、「新世界」の古典学―個人的な経験から (Classics in the 'New World': A Personal Account)」と題して講演を行った。同氏が学問を志した地域では、多くの語学を習得する必要がある古典学研究の修養は困難の連続であったと述べ、その中で学問的つながりを持つべく

努力、研究を続けている現状を語った。続いて日本学術振興会特別研究員で本学兼任講師の福島正幸氏が「日伊古典教育の交差点―Liceo Classico Galileo Galileiの事例を通じて」と題し、同氏が学んだイタリアのLiceoでの古典学教育を紹介した。古典学が深く根ざしている同国においても研究を志す学生が減少傾向にあるが、まだまだ身近な学問であると指摘。研究者が増えない日本においては、まず古典学への興味を深めてもらう必要性を語った。

千葉大学助教の酒嶋恭平氏は「歴史学と西洋古典学の間―日・英大学における西洋古代史教育の比較から」と題して講演。同氏が在籍したエディンバラ大学(英国)における授業資料を提示しつつ、同大の西洋歴史学は原典解釈よりも、帝国主義拡張や人種差別を正当化するために利用された古典学史を徹底して学ぶ教育内容であると説明した。

最後はダブリン大学のブライアン・クルーズ氏が「ベルギーの教育制度における古典文学―展望と進展 (Classics in the Belgian Education System: Prospects and Advancements)」と題し、オンラインで講演を行った。同氏が学んだベルギーの古典学は、まずオランダ語圏(フランドレン地域)とフランス語圏(ワロン地域)があり、両地域での教育内容や、独自性について語った。古典学を学ぶ生徒の減少は他の国や地域と同様だが、多様な教育ツールを活用していく等、今後も古典学修養における課題と真摯に向き合っていくと述べた。

講演後は早稲田大学教授の宮城徳也氏が閉会の辞を述べ、会を締めくくった。

ベスト・ティーチング賞 10人を表彰



国学院大学教育開発センターは5月8日に令和6年度「学生が選ぶベスト・ティーチング賞」の表彰式を渋谷キャンパス有栖川宮記念ホールで開催した。

この賞は、学生が授業の達成度や満足度について答える「授業評価アンケート」の結果に基づき、優れた実績を上げた教員を表彰するもの。

令和6年度は10人の教員に贈られ、表彰式には受賞者のうち6人が参加した。

はじめに石川則夫・教育開発センター長(教育開発推進機構長・副学長他)があいさつし、針本正行学長から賞状と副賞が手渡され、受賞教員の創意工夫をたたえた。

令和6年度の受賞者は以下の通り。

- ◆文学部▷飯倉義之教授▷多和田真理子教授◆法学部▷高橋信行教授◆経済学部▷星野広和教授◆神道文化学部▷平藤喜久子教授◆人間開発学部▷備前嘉文教授◆観光まちづくり学部▷米田誠司教授◆兼任講師▷織田憲嗣講師▷高木加奈絵講師▷田中章義講師

たまプラーザ宇宙の学校 学生が工夫を凝らし開催



5月24日、たまプラーザキャンパスで、「たまプラーザ宇宙の学校2025」の開校式と第1回スクーリングが開催された。15回目を迎えた今年は約60組120人の親子が参加した。

「宇宙の学校」は、人間開発学部の学部活性化事業「人間開発・花咲くプログラム」のひとつとして、小学校低学年の児童とその保護者を対象に毎年実施されている。共に学びを深める場として全3回で構成されており、運営はすべて学生が担当。宇宙航空研究開発機構(JAXA)宇宙教育センターや、NPO法人「子ども・宇宙・未来の会」(KUMA)の共催で実施している。

開校式では、校長を務める近藤良彦・同学部教授が「宇宙」をテーマにミニ講演を行い、その後、傘袋を使ったロケット工作に取り組んだ。学生たちが、試行錯誤しながら作業に挑む子どもたちを丁寧サポートする様子が見られた。

経済学部ゼミ個別ブース相談会 上級生がゼミ選びをサポート



経済学部の第1次ゼミ個別ブース相談会が5月7日と9日に渋谷キャンパスで開催された。この相談会は、2年次後期から開講されるゼミ「演習I」の選択に向けて、経済学会学生委員会が毎年主催しているもの。

当日は、各ゼミに所属する同学部の3・4年生がブースを担当し、研究テーマや活動内容について資料を用いて紹介。参加した2年生は、「実際にゼミに在籍する先輩や教員と直接話すことで、ゼミの雰囲気や選考方法の違いを知ることができてよかった」と話し、ブースを担当した3年生は「後輩たちが自分に合ったゼミを選ぶ手助けができればうれしい」と語った。



5月28日、第13回観光まちづくりカフェが、各所で観光まちづくりに取り組む研究者や専門家などをゲストに招き、講演会などを通して観光まちづくりを考える機会として開催されているもので、今回は、「突端から風をおこす―まちおこしゲリラの挑戦」をテーマに、Yプロジェクト株式会社代表取締役の島康子氏を招き実施した。

第一部では、島氏による講演が行われた。島氏は、大間港(青森県)で大漁旗を持ちフェリーの出迎えや見送りをする「旗振りゲリラ」や、まちおこしゲリラ「津軽海峡マグロ女子会」の発足から現在に至るまでの活動を説明しつつ、地元・大間におけるまちづくりに関して語った。

第二部では、観光まちづくり学部の南雲勝志教授がファシリテーターを務め、島氏とのトークセッションを繰り広げた。質疑応答で今後の展望について質問を受けると「未来に向けてつなげていくことを頑張っているかなければならないと考えている。自分と同じ活動を続けるのではなくても、同じような思いを持って、その時代に合った視点で新しいことを起こしてくれる人たちがいる街になってほしい」と語った。そのほかにも、仕事や家庭とまちづくり活動のバランスの取り方についてや、活動に対する地元住民からの反応の変化についてなど多様な質問が飛び交い、会場は活気を呈していた。



研究開発推進機構主催、研究開発推進センターおよび校史・学術資産研究センター共催の公開研究会「神社史料の保存と継承/神社史料情報の学術還元」が5月18日に、渋谷キャンパス芸術メディアセンターで開催され、オンラインを含むおよそ70人が参加した。冒頭、笹生衛・研究開発推進

機構長(神道文化学部教授)が「神社史料研究はまだ可能性があり、本研究会は今後の神社史料研究のあり方を考える大変有益なものになると考える。先生方の報告をしっかりと拝聴したい」とあいさつし、お茶の水女子大学准教授の大藪海氏が「中世神社史料研究の現状と課題」と題して基調講演を行った。続けて比企貴之・研究開発推進機構助教が「近代史学史と石清水八幡宮の史料群」、京都芸術大学教授の野村朋弘氏が「松尾大社史料の伝来と保存」、東京大学史料編纂所教授の遠藤基郎氏が「蓄積・共有発信型実務担当の経験からデータベース・レポートの利用」と題してそれぞれ報告した。

最後はこれまでの登壇者に進行役の松本久史・研究開発推進センター長(神道文化学部教授)が加わってディスカッションが行われ、「今後、本機構で取り組む学際的なプロジェクトに向けて、重要な研究領域と位置付けて、しっかりと研究成果を社会に還元できるようにしていきたい」との、笹生機構長の言葉で締めくくった。

第13回観光まちづくりカフェ まちづくりの現場を学ぶ

研究開発推進機構公開研究会 神社史料研究のあり方を考える

インフォダイジェスト

…在学生 …保証人 …卒業生 …一般 …受験生
内容 日にち 時間 場所 対象 定員 料金 申し込み 問い合わせ

大学からのお知らせ

高校生向けコンテスト作品募集

①第29回全国高校生創作コンテスト

【部門】

- ▶ 短篇小说の部 (1人3篇以内=指定用紙10枚以内)
- ▶ 現代詩の部 (1人3篇以内=指定用紙2枚以内)
- ▶ 短歌の部 (1人3首以内)
- ▶ 俳句の部 (1人3句以内)

【表彰】 最優秀賞 (各部門1人、賞状・副賞5万円・記念品)、優秀賞 (各部門2人、賞状・副賞3万円・記念品)、佳作 (各部門5人、賞状・記念品)、文部科学大臣賞 (1校、賞状・副賞5万円相当の図書カード・記念品)

②第21回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト

【部門】

- ▶ 地域文化研究部門 (祭り・伝統行事・郷土料理・方言などの調査研究=個人・団体)
- ▶ 地域民話研究部門 (昔話・伝説など民話の調査研究=個人・団体)
- ▶ 学校活動部門 (学校やクラス単位での生徒による地域連携や地域課題研究の活動などの報告に加え、地域の一員として学校や生徒の「学びのあり方」について、担当教員が短くまとめたレポートを添えたもの) ※当部門のみ、過年度の作品も応募可能

【表彰】

- ▶ 地域文化研究部門・地域民話研究部門：最優秀賞 (個人・団体各1作品、賞状・副賞5万円・記念品)、優秀賞 (個人・団体各2作品、賞状・副賞3万円・記念品)、佳作 (個人・団体各2作品、賞状・記念品)
- ▶ 学校活動部門：優秀賞2校 (賞状・副賞3万円相当の図書カード・記念品)
- ▶ 折口信夫賞：1作品 (賞状・研究費5万円・記念品)

応募について

【応募期間】 7月1日(火)~9月5日(金)必着

【応募条件・概要】

▶ 高校生であること ▶ 自作未発表のもの

【応募方法】 各コンテストのHP (二次元コード) にアクセスしてください。

▶ WEB応募

HPにある受け付けフォームから必要事項を入力して登録してください。作品の提出は、登録後に提出方法をメールでお伝えします。

▶ 郵送応募

HPから専用の応募用紙を印刷し、必要事項等を記入して応募してください。



第29回全国高校生創作コンテスト



第21回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト

【発表】 11月中旬に入賞者に通知、主催者HPでも公表します。

☎高校生新聞社コンテスト事務局

(☎042・724・2750 ☎042・724・2860)

※お知らせいただいた個人情報は、主催者において本コンテストの審査、本人および学校への連絡や資料の発送に利用いたします。なお、個人情報を第三者に提供することはありません。応募作品の返却は不可、入賞作品の著作権は当主催者に帰属します。

公開古典講座

☎昭和初期に開講した「万葉講座」の流れを受け継ぐ伝統ある講座です。「万葉集」と「源氏物語」の2講座で、それぞれ1日2講、5日間で10講を実施します。学内外の研究者が講師となり、作品の魅力に迫ります。

☎7月22日(火)~26日(土)

☎場 渋谷キャンパス常磐松ホール

☎料 各講座1日2000円。全日程申し込みの場合は割引制度があります。詳細はお問い合わせください。

☎☎7月9日(水)まで (必着)。申し込み方法

は、①WEB (二次元コード) ②FAX

(03・5466・0394) ③郵送の3方法。

詳細は大学HP (二次元コード) からご

確認ください。

☎☎エクステンションセンター (☎03・5466・0270)

キャリアサポート

※詳細確認・申し込みはK-SMAPY II から行ってください

就活エージェント活用セミナー

☎新卒対象の就活エージェントは数多くあり、そのサービス内容も多種多様です。中には「選考対策を満足に行ってくれない」など、不満を感じた先輩もいます。就活エージェントを活用する前に知っておくべき効果的な活用方法をお伝えします。

☎7月2日(水) ☎4年生

第1回求人フェア

☎就職活動中の4年生を支援するため、新卒応援ハローワークや就職活動のナビサイトから専門スタッフを招き、優良求人紹介や企業情報提供、個人面談などを実施いたします。

☎7月16日(水) ☎4年生

博物館



料無料
時 10~18時 (最終入館17時30分)
祝日を除く月曜休館

※博物館関連イベントの問い合わせは☎03・5466・0359

特別展「アイヌモシリーアイヌの世界と多様な文化」

☎本展は、国立アイヌ民族博物館の開館5周年を記念し、同館と共同で開催される特別展です。アイヌ民族は北海道や樺太、千島列島、東北北部などに広く暮らし、独自の言語や口承文芸、伝統儀礼、工芸など豊かな文化を育んできました。展覧会では、江戸時代以降の資料を通じてアイヌ文化の多様性を紹介するとともに、松浦武四郎の踏査記録や和人との関係を描いた作品を展示。日本の近代化による同化政策で文化継承が困難になった歴史や、現在も失われず受け継がれるアイヌのアイデンティティと文化復興の取り組みに触れ、多文化共生の大切さを考える機会とします。

☎6月28日(土)~9月23日(火・祝)。期間中ミュージアムトーク・ワークショップなどを実施

☎場 博物館企画展示室

女子ソフトテニス部

春季大会個人・団体に3位入賞続く

国学院大学女子ソフトテニス部は5月3・4日に開催された第32回関東学生ソフトテニスシングルス選手権大会で、庭田咲月選手 (神文1) が3位入賞を果たした。準々決勝で同部の濱島怜奈選手 (初教4) との同士討ちを4-3で制して準決勝に進出。明治大学の選手と対戦し、善戦するも力及ばず0-4で敗れた。

また、5月10・11日、白子サニーテニスコート (千葉県白子町) で行われた、関東学生春季1部リーグ戦では、初戦から強豪の早稲田大学と対戦し、3ペアとも先行して主導権を握る場面もあったが、勝

ち切ることができず惜しくも1-2で敗れた。その後、第5戦までを戦い2勝3敗とし、3校が同成績で並ぶ接戦となったが、得失点差により3位入賞となった。

さらに、5月12・13日に行われた第76回関東学生ソフトテニス選手権大会では、高嶺心萌選手 (中文4)・丸田梨瑚選手 (初教2) 組が第1シードとして出場。準決勝で明治大学のペアに惜敗し、こちらも3位に入った。今大会には同部女子から15ペアが出場し、4ペアがベスト16、7ペアがベスト32入りを果たすなど、選手層の厚さを示した。



1部リーグで3位入賞を果たした選手たち
写真/ソフトテニス・オンライン編集部

女子バレーボール部

春季リーグ3部全勝優勝で2部昇格

関東大学春季バレーボールリーグ女子3部が4月13日から5月18日まで開催され、国学院大学女子バレーボール部が全11戦を全勝で制し、3部リーグ優勝を果たした。開幕から第1、2戦をともにストレート勝ちで順調な滑り出しを見せると、第3戦では昨季敗れた流通経済大学と対戦。1セット目を失うも、以降は巻き返して3-1で勝利した。

その後も勢いは止まらず、第9戦までを全勝で突き進み、迎えた第10戦では、同じく全勝で並んでいた中央学院大学と対戦。第1、2セットを接戦の末奪

い、3-1で勝利し単独首位に立つ。最終戦となった武蔵丘短期大学戦も同様に3-1で勝利し、見事全勝での優勝を飾った。

そして5月25日、2部昇格をかけた入替戦に臨んだ同部は、国際武道大学と対戦。第1、2セットを連取し勝利目前とするも、相手の粘りにセットカウント2-2に持ち込まれる。最終第5セットも先行され、先にマッチポイントを握られる苦しい展開となったが、土壇場でデュースに持ち込み、逆転で接戦を制し、悲願の2部昇格を果たした。



悲願の2部昇格を果たした女子バレーボール部のメンバー

K:DNA —— 創立143年を迎えた国学院大学の遺伝子…個人・個性を尊重する校風 若いエネルギーが未来を変える

柔道部

東京学生柔道優勝大会 初の準優勝

5月25日に男子第74回・女子第36回東京学生柔道優勝大会が日本武道館（東京都千代田区）で開催され、国学院大学柔道部は男子の部で準優勝を果たした。

本大会は各大学7人の代表選手による点取り式トーナメント戦で行なわれ、全35校が出場した。同部は2回戦から登場し、大正大学と対戦。2番手の次鋒・中村勇吾選手（経2）が払巻込みで技ありを奪い優勢勝ちすると、そこから連続で勝利を重ね6-0で初戦を順調に突破した。

3回戦は帝京大学と対戦。2番手から5番手までの選手が一本勝ちを決め4-0で勝利した。続く4回戦は日本大学と対戦。1番手の次鋒・中村選手が腰車で一本勝ちを決めたが、以降は引き分けや失点が続いた。それでも、6番手の副将・清水雄護選手（経3）が朽木倒しで優勢勝ちを決め2-1で接戦をものにした。

準決勝は日本体育大学と対戦。引き分けが続くなか5番手の三将・真崎煌選手（観まち2）が内股で一本勝ちを決め、1-0で決勝に駒を進めた。決勝は昨年度優勝の東海大学と対戦し、各選手が健闘したものの、0-5で敗れた。同大会での準優勝は、同部創部以来初となった。



決勝戦前の選手たち
(同部提供)

荒川選手 トルコジュニア柔道 国際大会で優勝

5月3・4日にトルコジュニア柔道国際大会（トルコ・イスタンブール）が開催され、国学院大学柔道部から男子73Kg級で日本代表として出場した荒川琉正選手（健体1）が優勝を飾った。

荒川選手は1回戦でモルドバ共和国代表選手に一本勝ちを決め、流れに乗ると、続く2回戦、3回戦でも一本勝ちで準々決勝に駒を進めた。準々決勝ではブルガリア共和国代表選手から横四方固めで有効を奪い、そのまま優勢勝ち。続く準決勝はウズベキスタン代表選手に対し小内刈りで技ありを奪い、優勢勝ちで制した。決勝戦ではフランス代表選手と対戦し、荒川選手が果敢に攻める展開の末、相手選手の反則で試合が終了。国際大会での初優勝を決めた。

荒川選手のコメント

国学院大学入学後初の試合となったトルコジュニア柔道国際大会では、多くの方のサポートのおかげで万全の状態で臨むことができ、優勝を果たせた。また、川上智弘・同部コーチ（平24卒・120期法）のサポートにも助けられ、冷静に戦うことができた。この経験を糧に、今後の大会でも勝ち続けられるよう努力していきたい。



男子73kg級を制した荒川選手
(左から2人目・同部提供)

陸上競技部

関東インカレ 3選手入賞の活躍

第104回関東学生陸上競技対校選手権大会が5月8日から11日にかけ、相模原ギオンスタジアム（相模原市）で行われ、男子2部に所属する国学院大学陸上競技部からは3選手が入賞する活躍を見せた。

8日に行われた10000m決勝では、辻原輝選手（史3）が留学生選手に懸命に食らいつき、最後まで攻めの走りを貫いた。結果、日本人選手3位の28分31秒42で7位入賞となった。11日の5000m決勝では

野中恒亨選手（健体3）が留学生集団にも果敢に挑み、日本人選手1位の13分52秒93で5位入賞。同日のハーフマラソン決勝では、高山豪起選手（法4）が序盤から先頭集団でレースを展開。最後の1周でサポートをかけて積極的に仕掛けたが、勝ち切ることができず1時間1分57秒で5位入賞を果たした。この結果、高山選手は同種目で3年連続の入賞となった。



5000m決勝で日本人1位となった野中選手
写真/月刊陸上競技

硬式野球部

東都大学野球1部春季リーグ5位

国学院大学硬式野球部が所属する東都大学野球1部春季リーグは5月27日に全日程を終えた。

第4週は中央大学と対戦。5月10日の第1戦は相手投手にヒット1本に抑えられ1-4で敗戦。11日の第2戦は二回裏1死2・三塁の場面で大谷汰一選手（経営1）の犠飛により1点を先制すると、続く三回裏には1死満塁の場面で渡辺嶺選手（健体4）が適時打を放ち2点を追加した。その後、五回表に2点を返され1点差に迫られるも、八回裏に赤堀颯選手（経営3）の適時三塁打、続く立花祥希選手（健体4）の適時二塁打で2点を加え5-2で勝利を飾った。勝ち点のかかった12日の第3戦は、七回を終えて2-2と均

衡していたが、八回、九回に1点ずつを奪われ、2-4で惜しくも敗れた。

第5週は青山学院大学と対戦。5月22日の第1戦は投手戦となり、最後まで得点を奪えず、わずか1点に泣く0-1の惜敗。23日の第2戦では、立ち上がりから連打を浴び、五回までに6点を失う苦しい展開。それでも六回表、主将・宮坂厚希選手（健体4）が意地のソロホームランを放つも反撃はそこまで。1-6で連敗となった。

この結果、同部は3勝9敗・勝ち点1の5位で春季リーグを終えた。攻守の要となった緒方漣選手（健体2）は遊撃手のベストナインに選出された。



青学戦でホームランを放った宮坂主将